

長万部の

教育 コーナー



今、学校では

おべんとうおいしいね！

さかえ保育所

さかえ保育所では、毎月五日（年数回）おべんとうの日があります。いつもは保育所にいい匂いがして、調理員さんが作ってくれたできたての給食を食べています。子ども達にとっておべんとうの日は特別です。大好きがいっぱい詰まった宝箱みたいですね。朝から早くお昼の時間にならないかな、と楽しみにしています。お弁当箱を開けた時の子ども達の嬉しそうな表情、お母さん達にも見せてあげたいです。この日は天気も良く、シートをひいてみんなで外で食べました。お迎えの時には「美味しかったよ」「ま



みてみて、おべんとう♪

歌声集会を終えて、小中高の連携を活かして

長万部小学校

中学校入学後の学校不適応から生じる不登校やいじめの問題など、いわゆる中一ギャップの問題が全国的に深刻化し、各地で対策が講じられていく現状があります。文部科学省から出された、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、不登校状態となったきっかけとして、「不安などの情緒的混乱」が最も多く、「無気力」「いじめを除く友人関係を含める問題」であると報告されています。このような中一ギャップの大きな原因として、積極的に新しい人間関係を結ぶことや相手の気持ちに配慮した言動をとることが、苦手であることも分析されています。本校の児童は、明るく素直であり、学校行事などでは児童会を中心に何事にも一生懸命に行動し、小学校の段階で人間関係づくりの力を意図的に

的、計画的に育て、子どもたち一人一人が自己有用感達成感を得ることができるよう、人間関係づくりを努めています。このように、九月二十一日（木）本校では、本校で歌声集会を実施いたしました。また、小・中・高が連携を図ることができ、四校の児童会、生徒会役員でつくる「長万部町いじめ撲滅宣言」作成委員主催の「いじめ撲滅宣言」うたごえ集会が、十二日、長万部小で開かれ、小中高生ら約二百四十人が、周囲からいじめをなくすことを誓いました。各校の児童会と生徒会の代表がステージに立って、「私たちは、互いを認め合い、一人一人の立場を考え、常に相手を思いやり行動します」と、「いじめ撲滅宣言」を唱えま

生徒の進路実現のために

長万部高等学校

十月から後期がスタートしました。今、三年生は放課後も遅くまで残りそれぞれの進路実現に向け準備を進めています。本校では、九月に三年生進学希望者を対象に模擬面接指導を行いました。三年生を対象とした模擬面接指導は、四月（全員対象）、六月（就職希望者）に続き、三度の実施で生徒は志望動機に

加え、高校生活で頑張ったことや、時事問題等について質問され、緊張した様子で答えていました。先生方からのアドバイスに対して熱心に耳を傾け、積極的に質問する様子も見られました。本校では面接指導以外、講習にも力を入れています。夏休みには進学講習と町からの助成を受けた公務員講習も実



施しました。十月からは放課後講習、個別の添削指導も行なわれております。生徒の進路実現のため、教職員一同全力でサポートしています。



した。参加者はこの後、合唱曲のビリーブを声高らかに歌い上げました。傷ついた友人を思いやり、支える心を表した歌詞で、美しい歌声に、会場で見守っていた保護者の方々から大きな拍手を送って頂きました。今後も、長万部町の特色である小中高の連携を持続させながら、しっかりと子どもたちの教育活動を充実させていきたいと思ひます。



9/17 学校祭 1年合唱



9/17 学校祭 吹奏楽部発表



9/17 学校祭 2年合唱



9/17 学校祭 全校合唱



9/17 学校祭 3年合唱



9/17 学校祭 P.T.A 食堂にて



『恩返し』と『恩送り』と！

長万部町立長万部小学校長

長瀬 雅一

よく日本人のスポーツ選手が金メダルを獲得したり優勝したりすると、〇〇さんや応援して下さった皆さんに今までの『恩返し』がしたくて頑張りました。とテレビでコメントするのをよく見かけます。

ところで、『恩送り』という言葉はご存じでしょうか。受けた施しや恩を、直接その相手に返すのではなく、自分ができるよいうになったときに地域や周りの誰かに返す。「吉里吉里人」や「ひよこりひよこりうたん島」など有名な作家の井上ひさしさんと親交のあった、一関在住の作家及川和男さんが本の後書きに井上ひさしさんが語ったことを記しています。

井上さんは、作家としての義務の合間を縫い、なんと無報酬で作文教室を何度も開き、100人以上の受講生に丁寧な教えていたとのことでした。

井上さんは、中学時代、どうしてもほしかった辞書を本屋で見つけて万引きしようとしたところを店主に見つかりました。その瞬間、井上少年は、警察行きを覚悟しましたが、店主は、なんと井上少年を店の裏に連れて行き、夕方まで薪を割らせました。終了後、店主は、「職人に頼む代金に比べたら辞書代は半分だ。」と言ひ、辞書と半額分の賃金を手渡したとのことでした。

「恩返し」は良く聞きますが、「恩送り」とは聞き慣れない言葉です。井上さんによると、江戸時代には「恩送り」という言葉が普通に使われていたようで、他の人から受けた恩を、直接その人に返すのではなく、別の送るに送るのだと言ひます。その送られた人は、さらに別の人に送ります。すると「恩」が世の中をぐるぐる回っていくことに

なります。人形浄瑠璃・歌舞伎「菅原伝授手習鑑」に「恩送り」という表現が見られるそうです。私たちは、この世に生を受けてから現在まで、様々な形で誰かのお世話になりました。産み育ててを渡してきました。産み育ててもらった親はもちろんですが、あの時の、あのひととの出会い、援助がなかったら、という「恩」を感じることが、誰にでも一つや二つはあることと思います。その時に気付かない「恩」というものもあります。むしろ、後になつてから分かる「恩」の方が多いのかもしれない。スポーツ選手もそうでしょうが、つらい練習、試験の先に栄光があります。その時は、ゴーチや先生からなぜこんなふうに言われ、やらされなければならぬのかと、自暴自棄になつたり、挫折感を味わつたりすることもある。何年も何十年も経つても、あの人のお陰で今の自分がある、とはつと気付く「恩」というものもあるでしょう。

受けた「恩」を返そうと思つたとき、その人はもうこの世にいないということもよくあります。恩に報いること、恩を返すことをしたいができません。そういうことからこの「恩送り」という日本独特の言葉が生まれたのかも知れません。

私は以前6年間、この長万部で多くの方々に計り知れない「恩」をいただきました。そして、今年、15年ぶりにご縁があり再び長万部に赴任いたしました。今の自分があるのは長万部の皆様によっていただいたお陰です。この先、少しでも「恩返し」と「恩送り」ができる自分でありたいと思ひています。